



## 五 ゴリラVSイノシシVSクマ？

今日も荒木先輩と一緒に峰山で練習。いつもの山道を登っていく。ガサガサ、ガサガサ。どこからか音がする。ガサガサ、ガサガサ。鳥か。いや、鳥にしては大きな音だ。その音がだんだん大きくなって来る。何かがこちらに近づいてきているのだ。まさか、イノシシ。先日、イノシシが市街地に出没して何キロも逃走し、最後は高校の校庭に逃げ込んだというニュースが放映されていた。この山にもイノシシがいるのか。まさか？

「先輩！」直人が大声を出した。「なんだ」荒木先輩が上り坂で立ち止まり、後ろを振り返る。「イ、イノシシですよ。ほら、お、音が近づいてきますよ。いて」直人は慌て過ぎたのか、唇を二回も噛んでしまった。唇は血が滲み、たらこ以上にたらこになった。ただし、唇の痛みよりも恐怖心の方が勝る。

「俺は、これまで何十回も山の中を走ったけど、イノシシに出会ったことはないぞ。だけど、向こうに見える屋島にはいるぞ。以前、昼の三時頃、屋島の山の中を走っていたら、十メートル先にイノシシを見つけたんだ。イノシシは夜行性だから明るいうちは出てこないと思っていたから安心してたんだ。イノシシにも寝ぼ介はいるんだろう。走っていたのは光が当たらない樹林の中だったから、イノシシは日が暮れたのだと思ったのかもしれないな」荒木先輩は、冷静かつ客観的に、まるで他人事のようにしゃべる。

「それで、先輩。どうしたんですか」

「イノシシも俺に気付いて、向こうが先に逃げてくれたんだ。もちろん俺も、そこからアスファルト道の方に一気にダッシュしたけどな。この峰山にイノシシがもし住んでいるとしたら、イノシシの泥風呂が見つかるはずだ」

「イノシシの泥風呂？」直人は想像した。イノシシが手ぬぐいを肩にぶら下げ、入浴料金のどんぐりを片手に握り締め、サンダルを履いて銭湯に向かう姿を。また、泥風呂に入浴した後は、左手を腰に付け、右手でどんぐりの実の乳を一気に飲む姿を。そんなことはないはずだ。ぶるぶると頭を振る直人。妄想よ、飛んで行け。

「ああ。イノシシは体に寄生虫がつくので、それを除けるために、水たまりの泥の中で体を洗うんだ。そう言えば、別の練習コースでもイノシシの泥風呂を見かけたぞ」遠い目で四方の山を見つめる荒木先輩。

「先輩。それはどこですか。はっきりさせてくださいよ」必死で荒木先輩に詰め寄る直人。

「ううん。どこだったかなあ」荒木先輩は、まぶたの裏側にイノシシの泥風呂の地図が書かれているかのように、遠い目を閉じた。

「その、イノシシの泥風呂があるということは、やっぱり、イノシシがいるということですよ」荒木先輩に髪の毛にひっついたガムのようにしつこくせまる直人。

「ああ、そうかもしれないなあ」ガムを簡単に髪の毛から取り除いたかのように、平然と答える荒木先輩。

「先輩は、イノシシが怖くないんですか」自分の周辺を何度も見回す直人。右手は荒木先輩のTシャツの裾を握っている。広葉樹の間に草が生い茂り、近くにイノシシが隠れていても見つけ

られない。

ガサ、ガサ。ガサ、ガサ。また音がし始めた。

「ひゃあ」直人は荒木先輩のTシャツから手を離し、背中に隠れる。これで、人間の盾は出来た。荒木先輩ならイノシシに噛みつくだろう。これで矛もできた。

「おいおい、俺をイノシシの防御壁にするのか。まあ、いいけど。心配するな。あれは鳥だ。ここではイノシシに出会ったことはない」

それは、やっぱりイノシシがいるということじゃないか。さすがのイノシシもゴリラには弱いらしい。

それに、今は屋島の話じゃない。ここ峰山の話だ。先輩がそう言うのなら信じよう。信じてみよう。でも、やっぱり信じられない。あの物音は鳥じゃない。鳥が羽ばたき、草の葉を揺らした音じゃない。それじゃあ、なんだ。あの音の正体は？

「出た」直人は凍りついたように立ち尽くした。確かにイノシシじゃない。クマだ。クマが二本足で立ったまま目の前を通り過ぎた。突然のことなので、直人は木に登ることも死んだふりもできなかった。結果的にうどの大木になったので、クマには気付かれなかった。クマは二人の前を通り過ぎ別の道に消えた。

「先輩。今のはクマですよ」

「馬鹿かおまえは。クマが服を着るか。眼鏡をかけるか」

そう言えば、クマは五分刈りで、ランシャツとランパンを履いていた。靴はナイキだった。

「でも、最近の犬は服を着ていますよ」

「それは飼い犬だろう。動物園じゃあるまいし、飼いクマなんて聞いたことがない。それに飼いクマなら首輪をしているし、散歩をさせている人間がいるだろう」

馬鹿は先輩だ。どこの世界にクマを散歩させる飼い主がいるんだ。力関係から言えば、人間がクマに引っ張られ、散歩させられはずだ。でも、そんなことよりも、クマがいること自体が問題だ。こんな小さな山にクマがいるなんて。

「心配するな。今のはクマじゃない。でもクマだ」

荒木先輩は何を言っているんだ。クマじゃないけど、クマだなんて。直人は目をクマの毛並みのように白黒させていると

「動物も種としては人間で、あだ名がクマだ。同じクラブのメンバーだ。山田だ」

「ええええ」愛もなく、魚もなく、えという言葉しか出せない直人。

「うちのクラブには、クマもいるんですか」もちろん、言葉には出さないけれど、心の中では、ゴリラもサルもいますけどね、と続けていた。

「だから言っただろう。生物学的には人間で、あだ名がクマだって」

人間。人間なのか。でも、どう見てもあの顔はクマだった。体つきもクマ背をしていたし、クマ股走りだった。まちがいなくクマだ。荒木先輩が何んと言おうとクマだ。直人はそう確信した。

再び、ガサガサ、ガサガサと草や木をかきわける音。今度こそ、本物のクマか。直人は恐怖のあまり、再び、うどの大木に化ける。

さっきのクマだ。確かに、ランシャツを着てランパンを履いている。顔はクマだが、姿は人間だ

。先輩の言う通りだ。クマじゃなく、人間だ。だが、クマ背とクマ股走りは間違いない。人間のくせにクマの真似をするのか。

「おい、クマ」荒木先輩がさらっと声を掛けた。クマ、いや、人間のクマが立ち止まった。

「おう、ゴリラじゃないか」

クマとゴリラ。このクラブは動物園か。

「紹介する。新人部員の松崎直人だ」急に紹介されて、直人は慌てて頭を下げた。

「松崎直人です。よろしくお願いします」

「山田です。こちらこそ、よろしく」ぼそぼそとしゃべるので、よく聞き取れない。

山田先輩は坊主頭で眼鏡をかけ、体はランナーというよりも柔道選手のようにがっちりとしている。走り方はがに股、クマ股だ。

「山田はラグビー部にも所属しているから、めったに練習に来られないんだ」荒木先輩が紹介する。

「それに、医学部を目指しているから、勉強も忙しいんだ」

「そうですか」すごい。高校二年生で、既に将来のことを考えている。それに比べて、自分は入学したばかりのこともあるが、将来、何になりたいのかなんて考えてもいない。山田先輩の顔をもう一度よく見る。クマのようだが、目は細めで可愛らしい。クマはクマでもパンダに似ている。

「じゃあ。俺は練習に戻るよ」

パンダならぬ山田先輩は山の中に消えた。

「さあ、俺たちも練習に戻るか」荒木先輩が登り坂に向かう。

「どうして、山田先輩は僕たちと一緒に練習しないんですか」直人は荒木先輩の背中に声を掛けた。

「あいつにはあいつの練習方法があるんだろう。基本的には、俺たちは自主性を重んじるんだ。決まった日に一緒に練習してもいいし、自主練をしてもいい方針なんだ。もちろん練習メニューも自分で考えて、自由だ」

「そうなんですか」と、答えたものの、直人は腑に落ちない。

「同じクラブのメンバーなんだから、一緒に練習すればいいと思うんですけど。別々に練習するんならば、同じクラブの意味がないんじゃないですか」

山道を登りながら荒木に尋ねる。

「そうだな。そうかもしれないけれど、人はそれぞれ自分の時間を持っているからな。その中で、どう合わしたり、合わさなかったりするかだ。どちらにせよ、同じ山の中にいるんだから、一緒に練習しているのと同じだ。俺たちの目標は、天狗になることだ。そうだろう。いろんな練習方法があっというんだ。正解は一つでも、そこへ辿る方法は複数あるんだ」

荒木先輩の答えに、直人は黙ったままだ。そうかもしれない。でも、やはり、一緒に練習した方が楽しいんじゃないか。だから、練習がきつくても、直人は荒木先輩と一緒に走っている。

ガサガサ、ガサガサ。再び、クマじゃなく、山田先輩が目の前を通り過ぎた。

「さあ、じっとしていないで俺たちも行くぞ」荒木先輩がスピードを上げた。

「はい」山の中の、鳥やイノシシ、そしてクマなどの生き物の気配を感じながら、直人も続いた

。